慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フエルヂナンド・ラッサルと独逸労働者（五、完）全独逸労働者同盟の終始–結論
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.10 (1917. 10) ,p.1314(64)- 1344(94)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19171001-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フエルヂナンド・ラツサルと獨逸勞働者（五、完）

全獨逸勞働者同盟の終始——結論

小泉信三

十一

「公開答狀」は慥かに雄篇である。其主張は理路井然として文章は雄勁であつた。ラツサルは實に自信を以て之を公にしたのである。彼れは「答狀」に對して其昔マルチンルウテルがキツテンベルヒ城内の寺院に掲記した論難文九十五篇に對すると同樣の反響を期待したと傳へられて居る。勿論ラツサルが實際是程の自信を懷いて居たものとすれば恐らく失望を禁じ得なかつたであらう。事實は遙かに彼の期待に及ばなかつたからである。けれども兎に角「答狀」はライプチヒ委員の多數を滿足せしめると同時にライプチヒ、ハムブルグ、フランクフルト及び萊因諸地方に於ける一部勞働者の熱情を以て迎へる所と爲つた。併し大なる反響は勞働者の間よりも寧ろラツサルの敵側から聽くことが出來たやうである。「答狀」は眞に進步黨を激怒せしめた。既に述べたる如く進步黨は民權民意の代表者として官僚政府に對抗して居た。而して進步黨の强味は一つに其民意の代表者として承認されて居る一事に存して居たのである。然るに「憲法爭鬪」正に酣ならんとする時に當つて彼等は「人民」の間に背信者を見出したのである。ビスマルクの政府は眞に民意を代表するものに非ずとの口實を以て進步黨を壓迫せんとした。宛も此時に際して、進步黨は「然り、進步黨は決して民意の代表者に非ず、少くも勞働者の利害を代表するものに非ず」と叫ぶ者を其背後に聞いたのである。而して顧みて民主々義者、共和主義者を以て自任するラツサルを其處に見出したのである。彼は直ちに進步黨の憎惡の焦點となつた。彼等は直ちに官僚の走狗を以て、彼を見た。進步黨が感情の上から、又自衛の必要上有ゆる手段を講じてラツサルの運動に妨害を加へやうとしたのは誠に當然の事である。中產階級は反動の極端に走り盲目的に「公開答狀」を批難した。「答狀」に含まれたる矛盾、其理論的欠陷を指摘することをなさずしてたゞ包括的に之を排斥した。而して反動の勢の趨く所シユルツエデリツチの如き資本主義の批評家も亦資本主義、自由主義の謳歌者たる

に傾くに至つたのである。之を稍〻ドグマチックに言表はせば「公開答狀」は獨り勞働者階級に市民階級と異なる別の利害あることを敎へた許りでなく同時に又市民階級に對して其特別なる階級利害の自覺を促がしたものと云ふ事が出來るのである。

一八六三年五月二十三日ドレエスデン、ライプチヒ、伯林漢堡及び萊因諸市よりの代表者十二人に依て全獨逸勞働者同盟 Allgemeiner Deutscher Arbeiteverein はライプチヒに創立され、ラッサルは其總裁に撰ばれた。ラッサルが友人 Ziegler と共に起草した黨則の第一條は同盟の政綱を明にする。曰く「……獨逸勞働者階級の社會的利害は普通直接選擧法に依てのみ完全に代表せられ、又社會階級の軌轢は是に依てのみ排除し得らるとの確信に基づき、同盟は平和適法の手段、就中輿論喚起の手段に訴へ普通平等直接選擧法の實現を期するものなり」而して其他の點に於て吾々の看過すること能はざるは「同盟」が甚しく專制的中央集權的に組織されてある事である。任期を五年とする總裁の手中には殆ど悉べての重要なる權限が置かれてある。彼は適當と認むる時適當と認むる副總裁を任命し、大會、委員會を召集し、委員に欠ある時は適當と認むる補欠者を指名する。一言にして云へば彼れは同盟内部に於て執政官（ディクタトオル）の權力を揮ふのである。今 Harms の言葉を引けば、今や「艦は艤裝せられ、勇敢なる乘組員は戰鬪部署に着き、司令官は艦橋に立ち、社會民主々義の號旗は檣頭に掲げられた。ラッサルが少年時の夢は遂に實現されたのである。

十二

併乍ら全獨逸勞働者同盟の發途は必しも滿足す可きものではなかつたのである。ラッサルは先づ此運動に對する勞働者の冷淡に憤慨した。創立後三ヶ月にして同盟は九百の同志を糾合することが出來た。併乍らラッサルの志は遙かに大きいのである。彼は焦慮した。冷淡なのは民衆許りではない。彼れは始め幾多知名の士の應援を豫期して居た。然るに彼れが豫期した識者の大多數は參加を拒絶した。就中ラッサルを最も失望させたのは彼れが深く信頼して居たロオドベルツスの拒絶であつた。此保守的なる國家社會主義者はラッサルの主張する生産組合に對して異見を抱くと同時に社會問題を政治問題にすることに不服

だつたのである。ラッサルもロオドベルッス許りは餘程斷念し兼ねたらしく、再三懇請を繰返し、若し之に代る可き適當のものがあるならば生産組合の主張は必しも固執せぬであらうとまで讓歩して居る。（一八六三年四月二十二日附ロオドベルッス宛書簡）其にも拘らずロオドベルッスは遂に最初の決心を反さなかつたのである。懊惱に堪へずしてラッサルは此年六月、事務を副總裁オットオ・ダムメルに托し避暑の爲めと稱して國外に旅行した。

旅行中彼れは深く全獨逸勞働者同盟の前途に就て考へた。成功を急ぎ目的の爲めに手段を擇ばざるラッサルは茲に一の誘惑を感ぜざるを得なかつたのである。それはビスマルクに秋波を送る――若しくはビスマルクの秋波に應へる――事であつた。而して此點に關してラッサルの態度は兎に角公明正大を欠き進歩黨の批難に對して充分人を首肯せしむるに足る辯解を與へる事が出來なかつたのである。何時如何にしてラッサルはビスマルクに接近したか。（若しくは如何にしてビスマルクはラッサルに接近したか）一切の臆測を避けるならば之に對しては明確に答へることは出來ぬ。兎に角、一八六三――六四年の交ラッサルが屢〻ビスマルクと會見して普通選擧及び生産組合の問題を論じた事は今日周知の事實である。たゞ是以上の詳細に就てはラッサルの死後ハッツフエルド伯爵夫人から出た社會民主黨側の報導と、ビスマルク自身の言明との間には不一致の點が甚だ多い。而して吾々は其何れをも無條件には信ずることが出來ないのである。

ラッサル――ビスマルクの交渉は一八七八年ビスマルクが社會黨鎮壓法案を提出した時、是に關聯してベエベルが之を帝國議會に公表した。是に從へばラッサルは一八六三――六四年の交每週三四回ビスマルクと會見して二つの問題を論じた。即ち緊急勅令を以て即刻普通選擧を實施すること及び生産組合に對して國庫の補助を給するの問題である。ビスマルクは全然ラッサルの説に服し、たゞ普通選擧は Schleswig-Holstein の問題が解決するまで待たなければならぬと答へた。此意見の相違の爲めに二人の交際には溝渠が生じた。而して其際交際を斷つたのはビスマルクでなくてラッサルであつたと云ふのである。之に對してビスマルクの答へて曰ふ。まことにラッサルと普通選擧の問題を論じはした。併し之

を緊急勅令を以て實施すると云ふが如きは問題にならなかつたのみならず是は自分の思ひも及ばぬ所である。又生産組合に關しては「今日と雖も其無用なることを信ずることは出來ぬ」たゞ當時政界の事情が其實施を許さなかつた許りであると。而してビスマルクに從へば最初會見を求めたのはラツサルであつてビスマルクではない而してビスマルクは單に一片の好意から此希望に應じたのである。「ラツサルは余に抑も如何なるものを提供し得たりしか。彼は其背後に何物をも有せざりき、一切政治上の會商に於て問題は常に do ut des（與へよ、然らば吾亦與へん）なり。“Was kannst du armer Teufel geben?”ラツサルは國務大臣たる吾輩に與ふ可き何物をも有せざりき」會見は前後を通じて四度を出でなかつた。其會見に於てビスマルクは少しく語りて多く聽きラツサルは少しく聽て多く語つた。而して其談話は最も愉快にして面白く、ビスマルクは常に會見の終りとなるを悲んだと云ふ。即ちビスマルクはラツサルとの交渉を以て何等政治上の意味なき純然たる私の交際なりと主張しやうとするのである。併し是は吾々の容易に首肯し難き所である。「ラツサルは余に抑も如何なるものを提供し得たりしか、……彼は國務大臣たる吾輩に與ふ可き何物をも有せざりき」とビスマルクは云ふ。併し當時政界の情僞に通ずるものは決してビスマルクの此言葉に耳を傾けなかつたであらう。實際ラツサルはビスマルクに提供す可き――多くの物に非ざるまでも――或物を有つて居たのである。ラツサルとビスマルクとは共通の敵を持て居た。ビスマルクに取て勞働者階級を進歩黨に背かせやうとするラツサルの事業が成功するか失敗に終るかは決して冷淡に傍觀し得る事柄ではなかつたのである。加之、ビスマルクは其就任の始め自ら間諜を放つて進歩黨と勞働者との離間を試みたらしい證跡さへ擧つて居るのである。（ビスマルク就任の當時、素性不明なる一勞働者 Eichler なるものライプチヒ勞働者委員會の間に現はれて頻に進歩黨との斷絶を論じたが、言行に矛盾多き爲め、勞働者間に信用を墜して姿を晦ました。然るに後年人は伯林警視廳の一警吏として再び Eichler を見出したのである。）成程ラツサル―ビスマルクの會見は遂に何等の具體的協約に終らなかつたのは事實らしい。併しそれは此會見が當初から政治上の意味を持つて居なかつたからではなく彼等の交渉に於て遂に代價の協定が成立しなかつたからで

あると解釋するのが至當であらう。

前に述べた通り、ラツサルが何時如何にして普國宰相に接近したかは詳でないが、一八六三年の秋旅行を終へて伯林に歸つたラツサルが萊因地方遊說――ラツサルの所謂閲兵――の途に上るや、人はビスマルクに對する彼れの態度が明かに一變したことを認めた。九月二十日より十日に亘り彼れが Barmen, Solingen 及び Düsseldorf 諸市に於て試みた「祝祭、新聞紙並にフランクフルト議員會議」Die Feste die Presse und der Frankfurter Abgeordnetentag と題する演說は實に Hermann Oucken の曰ふが如く「ビスマルクに對する愛の告白」だつたのである。之より先き七月一日普魯西政府は政府に不利益なる言論に壓迫を加ふる爲め新聞紙條例を發布した。一方、獨逸國民は所謂憲政擁護の爲めに奮鬪せる普國下院議員の名譽の爲めに各地に祝祭を催すと同時に、ビスマルクに對する示威運動としてフランクフルトに議員大會を召集した。ラツサルは此三つの時事問題を捉へ、誇張曲解の辯を弄して誹謗の矢を進步黨に放つたのである。第一彼れは進步黨の諸新聞が新聞紙條例に屈服して政治を論じなくなつた無氣力を嘲けつた。併し之れは惡意に出でたものなることを蔽ふことが出來ない。元來ビスマルクの目的は新聞紙條例に依て言論を制限するにあるのではなく、寧ろ新聞紙の言論を之に抵觸せしめ其を機會として反對黨新聞を撲滅することにあつた。然るに進步黨の諸新聞は巧みに政治問題を回避して沈默を守つた爲めにビスマルクの計略は齟齬したのである。ラツサルは無論其內情に通じて居た、而して知りつゝ進步黨の無氣力を攻擊したのである。「祝祭」に對するラツサルの批評も亦同軌に出でゝ居る。フランクフルト議員會議に就ても同樣である。彼れは「國民同盟」「國民同盟」と進步黨と殆ど同一體なることは前に記した)の首領 Bennigsen の閉會の辭を故らに曲解して之に批難を加へた。ベンニグセンは曰ふ、吾曹固より革命を欲せず又之を能くせずと雖も政府にして今讓步することなくんば、他日に至て革命起るも吾人は其責に任ずること能はずと。云ふまでもなく之は革命を仄めかして政府を脅威せんとしたものなることは何人の目にも明かである。ラツサルは此の明白な意味を故らに曲解して、彼等は革命を欲せず、即ち吾等の民主々義運動とは沒交涉であると宣告したのである。

斯の如く民主々義又は、社會民主々義の名に於て進歩黨に向ては誹謗の矢を放ちながら、ラッサルは遂に一言の批難をビスマルクには加へなかつたのみならず演説中には「進歩黨の諸氏は Herr von Bismarck を焦慮せしめんが爲め獨逸聯邦諸公に秋波を送りつゝある。彼等は聯邦諸公に媚びることに依てフオン・ビスマルクを脅かさんとするのである。卑劣ならずや……吾人は假にビスマルクと砲火を交ふるも猶且つ眞理は之を否定す可らず、フオン・ビスマルク一個の男子にして進歩黨諸氏は老婦女に過ぎざるなり。（大意）と云ふが如き、一節さへあるのである。進歩黨は之に對して固より平かでない。九月二十七日ラッサルが Solingen に於て同じ演説を繰返すや進歩黨に屬する勞働者が妨害を試みたのは異しむに足らぬ。ラッサル派の勞働者は直ちに暴行を妨害者に加へた。そこで會は遂に市長の解散する所となつた。於此ラッサルは「ラッサル萬歳」を連呼する數千の勞働者を率ゐて郵便局に赴き、（會場から郵便局まで道程十五分。勞働者の先頭が郵便局に達したる時、最後のものは未だ遠く會場を離れざりしと傳へられてある）左の電報をビスマルクに發した。

「進歩黨に屬する當市々長は銃劍を以て武裝せる憲兵と拔劍せる巡査とを率ゐて臨場し、何等適法の理由なくして余が召集せる勞働者集會に解散を命じたり。結社法に基づき抗議したれども聽かれず、民衆――會場に入るもの五千、會場前に集まるもの數千――の暴行は、辛じて制止しつゝあり。余は今憲兵及び余を拘引されたるものと誤信せる民衆とに擁せられて郵便局にあり。エルベルフエルド勞働者の旗旒は沒收されたり。即刻最嚴重なる處置を取られんことを請ふ」。

是が所謂電報事件である。吾々は深く立入つて此場合に於けるラッサルの心理を解剖することを要さぬ。併乍ら此事實を念頭に於て而して「此時に至るまで此時に至つてデマゴオグは民主々義者及び社會主義者を支配したり」と云ふ批評を讀む者は之れを失當なりとする理由を見出すに困しむであらう。

たゞ少しくラッサルに同情して解釋すれば是丈けの事は云ひ得られる。前に記した通りラッサルの社會主義はマルクスに依て基礎を築かれた。併乍ら國家

觀若しくは政府觀に於ては兩者の間に常に多少の間隔があつたのである。マルクスに從へば歷史は常に階級爭鬪の經過に外ならぬと同時に國家若しくは政府なるものは常に支配階級が他の階級を壓迫掠奪する爲めの方便に過ぎない。「共產黨宣言」中の文句を籍れば「近世國家の政府なるものは要するに全市民階級の共通事務を處理する一委員會に過ぎないのである。」果して然りとすれば勞働者階級の解放は現在の政府から何等の助けを求めることは出來やう筈がない、若し出來れば夫れは國家の自滅である。故に Marxist は一般的抽象的には國家を容認しても現在の國家若くは政府に對して其態度が否定的となるのは當然である。既に再三記した如くラツサルも亦支配階級隆替の說を述べるに方つては純然たる Marxist である。而して一時代に於て支配者階級は常に國政の權を獨占することも亦明かに承認して居る。併し彼れは近世國家の政府を以て市民階級の委員會と觀る程には徹底しなかつたのである。社會の變遷は要するに支配者階級の隆替に外ならぬ。併乍ら國家は此隆替の外に超然として儼存する。而して其の儼然たる國家永遠の目的は何ぞやと云へば「……人類の使命即ち文化の實現を完ふせしめ、……自由に向て人類を敎化し發展せしむるの一事」に存して居る（前揭「勞働者綱領」參看）のである。即ち國家は階級爭鬪の第三者として人類の爲めに高きもの、正しきものを保障するの責任を負ふ可きものと彼れは考へたのである。勿論純粹のマルクス學徒は峻酷に此見解を批評するであらう。併乍ら姑く當時の實際に適用して此觀方の當否を考へて見ると、多少之を容認す可き餘地がないではない。マルクスは政府を以て階級爭鬪の當事者とし、ラツサルは稍之を第三者と觀るに傾く。併乍ら當時經濟的發達の程度遙に英佛に及ばざる獨逸國內に於ては封建的利害の代表者とも云ふ可き官僚政府は少くも勞働者階級――市民階級の爭鬪に對しては超然たる第三者の形ちがあつた。此見地から觀察すれば佛蘭西の社會主義に鼓吹せられ、英國の材料に基づいて躰系を完成したマルクスが國家を以て階級爭鬪の一樣相を示すものなりとするのが當然であると同じ樣に常に念頭に獨逸國を置いて居たラツサルが國家、政府を以て文化、眞理、正義と云ふが如きものゝ保障者として勞働者の賴るに足る可き公平な第三者であると觀る傾があつたのも亦當然だと云ひ得るかも知れない。既に如斯兩者の國家觀が違ふ

ものとして考へて見ればラッサルが現在政府の代表者たるビスマルクに近づいたのはマルクスが假に同じ事をした場合よりも慥かに(通俗に云へば)罪は輕いのである。併乍ら之は豫め斷つて置いた通り、ラッサルに同情を持て解釋を試みれば是丈けの事は云ひ得ると云ふに過ぎない。是以上に論理を進めて例へばHarmsの如くラッサルは少しも疚む所なき良心を以て宰相に接近したものと斷定する勇氣は自分にない。是れは矢張り彼れが成功を急ぐの餘り手段を擇ぶに遑なかりしものと解釋するのが至當であると思ふ。

十三

フエルヂナンド・ラッサルの死は一八六四年八月三十一日の出來事である。彼れが「公開答狀」を公にしてから僅かに一年五ヶ月であつた。此の一年五ヶ月間の出來事を逐次列記しても興味は少ない。之を總括してラッサルは人間以上の意力を奮つて其生涯の精神力と肉體力とを此の一年五ヶ月の間に悉く傾け盡したと云ふより外はない。學者操觚者政治家、煽民家、外交官として彼れは殆ど有ゆる事をしたのである。キヨルン、デユッセルドルフ、エルベルフエルド、ソオリンゲン、バルメン、ロンスドルフ、ライプチヒ、彼は到處に遊說した。會議、討論通信は彼れの時間の大部分を要求した。此外に彼れはビスマルクと交渉し全獨逸勞働者同盟の爲めに黨則細則事務掌程の類を定め新聞紙に投ずる爲め論難解嘲の文を草し、猶ほ其上に「同盟」運動の爲めに數度法廷に引かれた。而かも猶ほ此多忙紛雜の中心に居て彼れは兎に角大小八篇の述作を公にして居る。就中シユルツエデリッチを嘲罵せるBastiat-Schulze von Delitzsch, der ökonomische Julian, oder Kapital und Arbeit 1864は決してラッサルの名聲を高からしめる著作でないけれども三百頁に近き其分量は明かに彼の勵精努力を證據立てゝ居るのである。

（「公開答狀」以後の述作を公刊の順を追ふて列記すれば「勞働者問題」（アルバイタアフラアグ）「勞働者讀本」（アルバイタアレエゼブフ）「祝祭新聞紙並にフランクフルト議員會議」「伯林勞働者に告ぐ」「バスチヤアーシユルツエ・フオン・デリッチ君」「伯林大審院に於ける國事犯裁判事件」「全獨逸勞働者同盟と普魯西國王の誓約」「デユッセルドルフ懲治裁判所に於ける裁判事件」の八である）

「全獨逸勞働者同盟」の爲めにラッサルは實に全力を傾けた。此一事は彼れの敵と雖否定することは出來ない。然るに之にも拘らず、勞働者同盟前途の困難は益

々加はる許りであつた。進歩黨の新聞紙は有ゆる種類の惡聲を放ち、彼等がラッサルの部下を首領に背かせやうとする攪亂策は屢〻功を奏せんとした。一方ラッサルはビスマルクの走狗なりと風説さるゝにも拘らず、普魯西の司法部は少しも彼に對する窮追の手を緩めなかつた。一八六四年に入ると彼は先つ「伯林勞働者に告ぐ」る小冊子中の或章句の爲めに國事犯として起訴せられ、幸にして無罪なることを得たけれども、別にデユッセルドルフ裁判所は前年の演説「祝祭、新聞紙…」の爲めに禁錮一年に處するの判決を下し、六月二十七日控訴院に於て六個月に輕減されはしたけれども、其辯護の爲めの出版物は檢事をして更に改めてラッサルを起訴せしめたのである。同時に之より先き伯林大審院に於ける辯護演説も亦法規に觸れて、五月缺席裁判は四ケ月の禁錮を宣告したのであつた。元來ラッサルは法廷に立つ事を恐れなかつた。或人の言葉に從へば彼は舞踏會に行く程の心持ちで法廷に出て、判事と傍聽者とを相手にして勞働者問題の演説を試みるのが常であつたが、斯の如く如何に切拔けても後から直ぐに新しい困難が現はれて來るとなると彼れも遂に自分の力量にも限りがあることをじない感譯には行かなくなつて來た。ラッサルも遂に Paul Lindau に向て此上一年半年の自由を奪はれることは自分の到底堪へ難き所である。自分には最早それに耐へる力はない。それ位ならば寧ろ國外に逃亡した方が優しであると云ふ意味の歎聲を漏らすに至つたのである（六月二十九日）

一方勞働者同盟の內部には絕えず軋轢があつた。或は幹部の或者と他の者とが反目する。或は幹部の或者がラッサルの獨裁權に對して不平を抱く。遂に本とラッサルの秘書であつた Vahlteich が進歩黨と勞働者同盟との提携を陰謀するに到て紛擾は頂點に達した。（Vahlteich は除名せらる。）同時に同盟は絕えず資力の不充分の爲めに苦められた。ラッサルは屢〻私財を投じて之を救はなければならなかつたのである。併乍らラッサルを最も失望させたものは勞働者階級その者の冷淡無氣力であつた。彼れは既に六四年の二月人に與へた書簡に於て「勞働者階級の冷淡と無感覺の爲めに經驗せる深き苦がき失望と咬むが如き衷心の煩悶」を訴へて居る。全獨逸勞働者同盟が創立されてから一年を經た後に於て加盟者は辛じて四千に達した。而かも、ラッサルは「公開答狀」の末段に於てその十萬に

達せん事を期待して居つたのである。ラツサルの心は漸く挫けた。元來ラツサルは寧ろ多病の人であつたが、勞働者同盟創立後の過勞と苦惱との爲めに健康は著しく衰へた。右に引用した書簡の中にも彼れは過勞の爲め神經衰弱に陷つて不眠症に患り夜は床上に輾轉反側して曉に及ぶ事を訴へて居る。而して又ラツサルは失望し懊惱しながら之を口外することを許されなかつた。全獨逸勞働者同盟の運動は着々成功に近づきつゝあることを廣告し得意を裝はなければならなかつた。之れが又一層彼れを苦しめたのである。一八六四年五月ラツサルが最後の餘勇を奮つて再び萊因地方に遊説を試み同二十二日Ronsdorfの全獨逸勞働者同盟創立一周年紀念會に於て運動の成功を誇稱し之より先き普魯西國王がシユレジエン織匠の哀訴を容れ、其救濟の爲めに法律を制定す可しと約束せりとの報導並にMainzの僧正Von Ketteler の著「勞働者問題と基督敎」（一八六四年）に言及し「吾々は今勞働者、人民、學者、僧正、國王等をして吾等が主張の眞理なるとを立證す可く餘儀なくせしめた」と稱して大氣焰を擧げて居る、其時の心持ちは略想像するに難くないのである。此遊説に於て萊因地方の人民は到處豫言者の如く又凱旋將軍の如くラツサルを迎へた。常に喝采を求めて止まないラツサルは慥かに此歡迎を喜んだには違ひない。併しロンスドルフの演説は其表面の文字通り、ラツサルが事業の成績に眞に滿足し得意を感じて居たものとして讀む可きではない。眞相は寧ろ其反對にあるだらう。ラツサルは失望懊惱を感じながら意を勵まして大言壯語し、之に依て强いて現在の懊惱を忘れ失望を慰めやうとしたのであらう。されば此こそ最も得意なる可きラツサルはそれから二ヶ月を經た七月二十八日ハツツフエルド伯爵夫人に答へて次の手紙を送つて居るのである。

「御身は余が政治を好むと考へて居るやうだが、實に余の心事を知らない事も甚しい。一切の政治を棄てゝ學問と、友誼と自然の懷に隱退することは何よりも余の求めて止まぬ所である。余は既に政治には疲れ且つ倦きた。勿論重大な事件が起るか或は權力を掌握することが出來ずならば依然として熱心に政治の爲めに奔走するだらう――最高の權力がなければ何事も出來るものではない。――併し小兒の戲れをするには余は餘りに老いた。だから始めから總裁に選ばれるのは氣が進まなかつたのである。たゞ御身の勸説默だし難く承諾し

たのである。其れ故不愉快で堪へられぬ。若しも逃れて御身と共にナポリに遊ぶことが出來たならば今が最好の時なのであらう(大意)

ラツサルは意氣沮喪して愚痴の繰言を述べて居るのである。是が其夏保養の爲め彼が瑞西 Rigi に遊んだ時の精神狀態であつた。ラツサルが生涯の最後の數週間に起つた出來事を了解する爲めには豫め此一事を念頭に置かなければならぬ

十四

ラツサルと Helene von Dönniges との關係及び決鬪に依る其結末までの細目は此處に揭げる必要はない。是に就て今迄屢引用した諸家のラツサル傳以上に特に詳細の事を知り度いと思ふ者は Bernhard Becker の Enthüllungen über das tragische Lebensende Ferdinand Lassalles 1868. Helene von Rackowitza (geb. v. Dönniges) の Meine Beziehungen zu F. Lassalle 1879 中に珍らしい材料を見出すであらう。此處にはたゞ殆ど逐條的に此事件の輪廓丈けを記せば充分である。

一八六二年伯林に於てラツサルは當時十八のヘレエネ・フオン・ドエンニイゲスを知り、ヘレエネはラツサルの爲めに殆ど婚約のあつた Janko von Rackowitza を顧みなくなつた。ヘレエネはバイエルンの外交官を父とし早熟にして放恣なる才女であつた。二年後の夏宛もジユネエヴに滯在して居たヘレエネはリギの旅館にラツサルを訪ね遂に結婚を約した。然るにラツサルは門地低きに加へて其公私の生活に關する樣々の惡聲は世人の耳にあつた爲めフオン・ドエンニイゲスは斷然ヘレエネの約婚を許さず、却てヤンコオ・フオン・ラコヰツアとの結婚を强いた。此間にヘレエネは一度父の家を逃れてラツサルの許に走つた事がある。止むを得ない場合には父母を捨てると云ふ約束があつたのである。然るに此時ラツサルは不思議にも極めて冷靜に彼女を諭して父の家に歸らした。ヘレエネは失望せざるを得なかつた。此事があつてから彼女は父の家に監禁せられ、有ゆる離間策が彼女とラツサルとの上に試みられた。ヘレエネの心は遂に漸くラツサルを離れたのである。ラツサルは殆ど狂して彼女を恢復する爲めには手段を擇ばなくなつた。彼は實に有ゆることを試みた。甚しきに至てはリヒヤルド・ヴグナアを通じてバイエルン國王に父ドエンニイゲスの說諭を嘆願し、又マインツの僧正に哀請して若しドエンニイゲスの決心を動かすことさへ出來るならば加特力教

に改宗するを辭せぬとまで申出でたのである。而して是等の手段が凡べて無效に終つた時彼れはヘレエネの父と約婚の夫とに決鬪を挑んだ。ドエンニイゲスは避けたけれどもラッコ并ッアは之に應じ而して八月二十八日早朝ジユネエヴの郊外に於てラッサルは丸を下腹部に受け三日の後絶命したのである。

ラッサルの死は豫期せざる效果を齎した。ラッサルの黨與は彼の死を事實有りの儘に看ることは出來なかつた。歴史の不合理とも評す可きか、彼等は此死に悲壯なる意義を認めやうとした。ラッサルは獨逸勞働者の爲めに、又主義の爲めに斃れた、――政敵の陰謀が彼を殺したものと、堅く信じたのである。彼等は直ちに復讐を思ふと共に此の時、から殆ど宗教に近きラッサル崇拜は一部勞働者の心を支配するやうになつたのである。後に至て思ひ合せばラッサルは早く其死を豫期しつゝあつたやうにも觀ることが出來る。五月二十二日ロンスドルフに於て演說を試みた時少くも表面上彼は得意の頂點に立て居た。而かも其演說の最後の一節は其語調に於て演說全體と太だ調和しないものであつた。「吾れ中道にして斃れなば、希くば余の志を繼ぎ余の仇を報ずるもの、我枯骨より生れ出でよ」と云ふ古詩を引用した後更に續けてラッサルは曰く「此文明の國民的大運動をして余の一身と共に亡びしむること勿れ、汝等の一人にして猶ほ息ある限り余が點じたる此火をして更に遠く廣く燃え弘がらしめよ云々」ラッサルは故らに沈痛の語を用ひて勞働者の心を動かさうとしたものか或は其健康日々に衰へつゝあることを自覺して不識々々言葉の悲調を帶び來るを制することが出來なかつたのか何れにしても後に至つて勞働者は彼が豫め死を覺悟したかの如きを見て悲壯の思を禁ずることが出來なかつたのである。復讐の一念は久しくラッサルの黨與を鼓舞策勵する刺戟となつた。

Lassalle, Lassalle, erweck' Dir einen Rächer,
Wo um Dein Grab der Leichenrabe kreist.

勞働者はラッサルの爲めに復讐の歌を作つて歌つたのである。

十五

ラッサルが性格の最も顯著な特徵としては彼れの權勢欲と虛榮心とを擧ぐ可

きであらう。權力と名聲とを彼れは何よりも貴しとした。之を知るものは彼れが全獨逸勞働者同盟の總裁として執政官の如き權力を揮つた事を怪まないであらう。彼は己の民主々義者たる事を確信したけれども、彼れの求める所は常に支配者たり專制者たることにあつた。ビスマルクは善くラッサルを知つて居た。彼れは嘗て評して「ラッサルは決して共和主義者にあらざりき。――彼の思想は明かに國民的、君主々義的なりき。……獨逸帝國がホオヘンツオルレルン家を以て終るか將又ラッサル朝を以て終るかは恐らく彼に取りて疑問たりしならんと雖も、彼の思想に至ては徹頭徹尾君主々義的なりき」と云つて居る。（一八七八年九月十六日帝國議會演説）ラッサルは勞働者の首領とはなつたけれども、決して身を勞働者の列伍に置くことを肯じなかつた。「勞働者の友」ではなくて常に彼等の救主を以て自ら擬したのである。彼は嘗て勞働者に媚びなかつた。常に叱咤し命令したのである。彼れが常に盛裝して勞働者の集會に臨んだ事は善く人に知られて居るが、同時に彼は學問、知識、趣味、資力、社會的地位の上に於ける己れの優越を示すことを常に怠らなかつた。常に好んで己れを語つたのである。事實を云へば彼は是以上の虚榮心を持つて居た。己れに關する事實を語る許りでなく、屢々己れの地位名聲を實際以上に誇張して吹聽したのである。虚榮心に憐するものは彼の芝居氣であつた。彼れの進退行動は常に觀客若くは聽衆を意識して居たやうに見える。觀客（聽衆）に及ぼす效果（エフエクト）は常に彼の念頭を離れなかつたのである。バウル・リンダウは一八六四年六月二十七日デユッセルドルフの法廷に於けるラッサルを見て明かにラッサルを俳優と評して居る。其記錄に從へばラッサルは先づ例に依て燕尾服を着け塗靴を穿いて場に現はれ、携へ來れる夥しき書籍新聞雜誌の類を卓上に積上げて法廷を驚かしたのである。やがて演説が始まると聲は態とらしきまでに抑揚せられ、顔面の表情は絶えず變化し、思想感情の表白は一々身振りを以て強められたのである。演説は深き印象を與へはしたけれども同時に聽衆は稍〻芝居的なりとの感を禁じ得なかつたと云ふ。（W. H. Dawson, German Socialism & F. Lassalle p.p. 196-8）

ラッサルの此一面は恐く理知に明かな批評家の冷笑に値するものであらう。けれども民衆は批評力を缺いて居る。ラッサルの性格の稍〻不純なる此一面――

デマゴオグとしての一面――が民衆を動かす上に與かつて力があつたことは爭はれない。識者は白眼に之を視たであらう。併し民衆は常に彼の演劇に喝采したのである。而して自ら高く標置し乍ら、常に民衆の喝采を求めて安じない處にラツサルの弱點は存したのである。

けれども之は彼の性格の一面に過ぎない。勞働者はラツサルの不純なる一面に依て動かされたと同時に彼の有する純粹なる、眞に價値あるものゝ爲めにも亦彼れに歸服したのである。夫れは彼の色彩强烈なる人格である。彼れの壓制を憎み權力に反抗する熱情と强固と云はんよりは寧ろ熾烈と評す可き彼の意志力とである。彼れは嘗てハツツフエルド伯爵夫人事件の爲めに學問を廢し八年を之が爲めに費やした事がある。而して其事件の爲めに彼れは全く不案内の法律學を研究して遂に浩瀚なる法學上の著述を公にして居る。困難はラツサルを屈せしめないで却て彼を奮勵させたのである。彼が最後の二年間に於て如何なる事業をなしたかを吾々は已に學んだ　多くの英雄と共に彼も亦欲するものは得らるゝものと信ずる人であつた。此熱情と意志の力は如何なる場合にも彼をして問題の中心、事件の主動者たらしめなければ止まなかつた。陳套の語を以て云へば彼は境遇に左右されずして自ら境遇を作る人間の部類に屬して居たのである。斯の如き熱情と意力の前に民衆が己を虛ふして盲從に甘ずるのは當然である。ラツサルに接觸した勞働者は彼の前には己れの意志を忘れたのである。彼は常に動かされる人でなくて動かす人であつた。此意味に於てブランデスの云ふ如く彼は文字通りagitatorだつたのである。洵に彼は英雄たることを妨げる多くの弱點を持て居た、併し同時に英雄にのみ見出し得る資質をも慥かに具へて居たのである。彼に公平ならんとする者は此一事を否定しない筈である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

一八七五年Gothaに會合せる獨逸社會主義者に依て社會主義勞働黨は組織された。ラツサルの遺黨と、ベエベル、リイブネヒトの黨與は茲に至り合して一黨を形成したのである。ベエベルは始め進歩黨に屬して居たのがマルクスの弟子キルヘルム・リイブクネヒトの影響に由て漸く社會主義に傾き、其黨與は一八六八年に

至つてマルクス主義を宣言した。一方全獨逸勞働者同盟は總裁斃れたる後 von Schweitzer の指揮の下に進歩黨を敵とすると同時に新に起つた第二の勞働黨と競爭反目しつゝラツサルの遺業を繼續したが、社會主義運動に對する公權の壓迫は遂に此二派(ラツサル派とマルクス派)を提携せしめるに至つたのである。而して此時に宣言されたゴオタ綱領中に賃銀勞働の制度を廢止して賃銀鐵則の作用を根絶し云々と云ひ、又社會問題解決の第一歩として勞働に從事する人民の民主的監督の下に國家の補助に依る社會主義的生産組合の設立が要求されて居るのは云ふまでもなくラツサルの主張を容れたものである。然るに其後十五年間に社會民主黨は漸くMarxismに征服せられラツサルの主張は遂に放棄される運命に會した。即ち一八九一年エルフルト大會は今日も猶ほ社會民主黨が奉じつゝある「エルフルト綱領」を可決した。而して是は忠實なるマルキシスト Karl Kautzky の起草に係るもので、此時以來賃銀鐵則、生産組合の文字は遂に社會民主黨の綱領に跡を絶つ事になつたのである。

然らば則ちラツサルの事業は遂に滅びたりと云ふ可きであらうか。自分は問者に反問する。今日獨逸社會民主黨中「エルフルト綱領」に對して不滿足を感じ修正の必要を唱へるものが漸く多い。今此派の主張が勢力を得てエルフルト綱領に或修正が加へられた曉、マルクスの事業は滅び若しくは傷けられたりとす可きであらうか。此場合に於ても彼の場合に於ても(固よりマルクスとラツサルを同列に置くものではないが)其自分はに然りと答ふ可き所以を知らないのである。ラツサルの事業は有産階級の民主々義以外別に勞働者階級の民主々義あることを始めて實行に依て示した所にある。獨逸に於ける勞働者階級運動――市民階級より獨立し、市民階級に對抗する勞働者運動――はラツサルに由て生れたのである。而してラツサルの運動は勞働者の階級的自覺を促がすと同時に市民階級の自覺も亦之に由て痛切にされた。此歴史的過程を促した所に彼の事業は眞正の意味を有つのである。賃銀鐵則や生産組合の運命は必しも深く問ふを要せぬ

Zu Breslau ein Kirchhof,
Ein Todter im Grab ;
Dort schlummert der eine,

Der Schwert uns gab.

此意味に於て獨逸勞働者は今日も猶ほ此歌を歌つて差支ないのである。

ラツサルは識者階級の一人として、自ら進んで勞働者の指導に任じた。然るに民衆の無知と無氣力と無洗錬とは甚しく彼を失望させた。彼は俗惡なるBourgeoisie無知なるProletariatの何れにも滿足することが出來なかつたのである。併乍ら之はラツサル一人の運命ではない。所謂識者が傍觀者批判者たることを止めて實際運動の渦中に投ずる時此の苦がき經驗は多少の程度に於て何人も免れることが出來ない。たゞラツサルの如き强烈なる――而して弱點多き――人格を此境遇に置けば悲劇が生れるのは當然である。果して彼の生涯は悲劇に終つた。

玆に同情す可きところがある。ラツサルを取て議論の主題にした動機の中には此意味も含まれて居るのである。(完)

此一篇は大正六年二月三日經濟學同攻會に於ける講演草稿に加筆したるものなり。

十月の三越

□第卅四回新柄陳列會　□一日より十五日迄
□寄切見切反物賣出し　□一日より……
□第四回美術展覽會　□一日より十日迄
□奠都五十年祭に因みて明治風俗展覽會　□十日より……
□不昧同好會主催不昧公遺品展覽會　□廿日より廿二日迄

東京　三越呉服店